

兒童觀の遷變

——某講演會における講話大要——

高島平三郎

昔から子供をどんな風に見たかを話し度いと思ふ。その見方に三つある。

第一は、人生觀に樂天觀、厭世觀、外に自分の努力によつてどうにでもなるといふ改良主義があると同じ様に、子供は始終快感をあたへるものであると見る見方で、子供を育てるのに、母は七十五度泣くと云ふが、それは一面又樂しみである。即ち愛の對照として見る。子寶として可愛らしい美しいものとして見る。又厭世的に見るのは餓鬼と云ひ、三界の首枷といふ。これ等は親子の關係できまり、時代、民族によると確定はされぬ。只日本人は外國人から見ると、日本人程子供を可愛がる國はない。實に子供の天國と云ふが、可愛がる事は可愛がる。概して人間の文化が進むと子供に對する考が正當になつて樂天的になる。一面理智が發達して子供の大切なる事を認め、眞に子供を理解して可愛い、ものを見る。

第二は、子供を人間研究の目的物として見る。こ

れに更に三つある。その一は、子供が生れるとそれをどう取扱ひ養ひ育てるか必然的に起る。子供の育て方の分れたのは、長い間の研究による。即ち初めは子供を意志的、實行的に見る。その中狩獵時代等が過ぎて生活に暇が出来るると親子の情が出来て来る。

その二は、子供の動作がうるはしく見える。詩の對照として子供を見る。これは平和になつた時である。日本は子供の愛をうたつたもので痛切なものである。山上憶良の「しろかねもこがねも玉もなにせんにしく寶世にあらめやも」の如き、子供そのものを美しいと見て歌つたものには、ゲーテ、ロングフェロー等にあり、日本には少なく、犬熊元道と云ふ歌人や信濃の俳人一茶のに子供生活そのまゝをうたひ、子供がよく浮び出てゐる。即ち子供を美の對照として見る。

その三は、科學の對照として見る。これは極めて新しいので、子供の體の研究さへ起りしは近年であ

る。一六七〇年オランダにレーデンホープと云ふ學者があつて、この先生が顯微鏡の發明によりトカゲの男性の生殖細胞を見つけ、子供の體の出来る事を知つたが、その顯微鏡の子供の圖には何も無い筈な所に、目も口も鼻もついて、人格化して居る。一八二八年にドイツの學者が母のトカゲの卵種を發見した。この學者は、胎生學の父と云はれて居る。此頃から段々子供の胎内の發育が分る様になつた。

兒童心理學の發達したのは、一七八六年今から三十七年前にドイツの哲學者で化學者であるヒードマンと云ふ學者が我子について四歳になる迄の發育を細く觀察して、一切心理的に解釋した。これが科學的研究の道を開いた人である。後百年たつて、アメリカで兒童研究をスタンリーホールが開いて、心理學の實驗法殊に發問法を研究に應用して、精神發育の方法を調べた。このホールの研究が英米に影響してゐる。日本でも三十年位前に研究會が出来て追々世間が兒童を認める様になつたがまだ、力の入れ方が足りぬ。

第三の見方は兒童が誰に屬するかと云ふ見方、子供は助けなき間が子供である。發育の終る二十五歳以下を兒童期として研究する人もあり、十五歳以下

と主張する人もあつて、子供と云ふ時期についても説が違ふが、子供の時期が長い程高等動物である、アミーバの様なペロ／＼したものは、直に分裂するから、母、娘の區別がない。それより魚、それより犬、猫、猿、人間と云ふ様に子供の時期が段々長くなる。二十五歳は最大限である。その間は兎に角人から助けられねばならぬ。兒童期は保護されねばならぬ。只そこに於て問題が起るが、一般に昔の開けぬ時代、精神の未發達の人は子供を自分の所有と心得個人に屬するものと考へて居る。丁度男子が女子を所有すると心得るのと同様である。己れのものだから己れの自由にするのと云ふ考である。國家となしてもそれを是認して居る時代もあつた。一八二八年進化論者ダーウインが南米を廻つた記事の中にフィラデルフェイロ(火の國の義)と云ふ國にフェーシアと云ふ一番開けぬ野蠻人がある。カノン(獨木舟)を作れぬ野蠻人は殆んどないのに、この種族は辛うじて作り、菜食を知らず、海から貝殻をとつて食べる。両親は裸かで海へ入つて貝をとつては食べた。鯨をうめておいて食べたりしてゐる有様、ダーウイン一行が望遠鏡で見ると、岩の上に十歳位の子供が、籠見度いな物を持つて、出て來ると、獸の様な人が海に入つては貝をとつて、そのかごの中

に入れて居る。その中子供が手をはなして籠を落したので拾つた貝は皆海の中に入つてしまつた。するど獸の様な男が、子供の兩手を捕へて岩にぶつけて幾度もぶつける中にとうとう死んでしまつた。その中女らしい野蠻人が出て来て、子供の死骸をおどろきもせず、悲しみもしないで、引ずつて家へ歸り、死骸をあぶつて、焼いて食べたと云ふ事がある。又此の人は「婆さん狩」と云ふ事もある。不漁で海に出られず、貝がどれぬと皆が食物に困り、一番初めに婆さん狩をする。お婆さんは三日も不漁がつづく、山へ逃げる。すると皆がつれて来て穴の中におしこめて、いぶし殺して、一族の者が集つて儀式をして食べる。これは極端であるが、この思想が子供に對して今でも残り、支那の上海には籠の中に子供を入れて、札をつけて賣る。けれど自分に屬すると云ふ此の考へ方は、今はアナクロニズム(時代錯誤)である。所屬が誰にあるかと云ふ見方は第二は、子供は家族に屬するものと考へる。これはどこの國にもあつた。これには美風もあつたがこの考も變らねばならぬ。お家騒動の起るのはその爲めである。長男を第一番に大切にする。いらぬ子は間引くといつて殺したり川に流したりする様になる。家と云ふ事中心も時

代錯誤でこの考で今の子供を教育するから誤である。所屬の第三、文化の進める兒童觀は、社會觀で、子供は社會に屬すると考へる。國家も社會の一つと考へる。この考へ方は一つの人道主義で唯美哲學の發達と生活の形式の變化から起つた考へ方である。今日は社會の生活の形式(home of life)が變つて來た夫唱婦隨と云ふ呑氣な道德ではゆけなくなつた。夫婦共稼ぎで、そこに婦人問題、兒童教育も起る、アメリカあたりでは赤兒のそばにパンとコーヒーを與へて、兩親が出かけ、學校から歸る子供は、家へかへつても誰も居ないから、途中ぐづぐづして何か盗んで食べたりする様になり、不良少年が多くなる。そこでやむを得ず、社會全體として、子供遊園、託兒場が出来る。又は時間をきめ往來をこめて巡查が周圍をまもり、指導者が來て子供を勝手に遊ばせる今日では父母が少くとも勝手に育てゝいゝと云ふ事なく國家社會の爲を考へて育てねばならぬ。子供をうるはしい可愛いゝものと云ふ事をうはつらでなくほんとうに見て、叩いたり罵つたりする代りに、泣く原因、怒る原因を考へてそれを取り去つて訓誡をあたへて眞の意味で可愛がらねばならぬ。

(未校閱……文責記者)